増殖（ソウマの場合）

四百字詰原稿用紙四十四枚

筆名・本名　前川美和

年齢　五十八歳

職業　主婦

略歴
1978　大阪女子大学学芸学部卒業
2003　関西学院大学大学院言語コミュニケーション学科修了
1978~1981　奥本製粉株式会社
1988~1994　中学・高校の非常勤講師
1995~2013　日本語教師

「うわあ、まぶしい！」

エミはエメラルド色に広がる海と、白い砂浜を前にして、思わず叫んだ。

「おおっ、何か明るいね。やっぱり日本の海とは違うな」

ソウマも日差しに目を細めながら、感心している。二人はパラソルの立ち並んだ一角に置かれた長椅子に横たわると、プーケットの風景の一部になった。

タイ旅行の一週間ほど前、エミが風邪をこじらせて肺炎になってしまったので、旅行をキャンセルしようかと迷った。思いの外回復が早く、予定通りタイに来られて、二人とも「日頃の行いがものを言うね」と喜んだ。

「来られてよかった」

「二人っきりで海外に来たの初めてだよね」

「そうよ。わたしが三回生で、ソウマが一回生のとき付き合い始めて、もう三年近くになるけど、二人で旅行に出かけることもなかったからね」

「バンドのライヴや練習が週末入ってること多いし、エミは保母さんしてるしね。オレもバイト忙しいからな」

「バイトより卒論でしょ？大丈夫？」

エミは心配そうにソウマの顔を見た。

二人は大学のサークルで出会った。エミの所属していた軽音楽部に一回生のソウマが入ってきたのだ。夏にソウマが同期のトシとヒデと一緒にバンドを組んだのだが、その時、憧れの先輩であるエミを自分たちのバンドに誘った。ソウマとトシはギターで、ヒデはドラム、エミはベースという構成のロックバンドで、他の有名なバンドのコピーではなく、オリジナルの楽曲を作って、プロを目指している。曲と詞は主にソウマが書き、アレンジはメンバー全員で考える形が定着してきた。エミはコンポーザーとしてのソウマの能力を認めていた。彼はハードロック、プログレッシブロック、ポップス、フォークなど様々なジャンルの引き出しを持っているので、バラエティーに富んだ曲が作れる。ソウマが一回生の終わりごろ、エミに告白し、付き合うことになったとき、サークルの皆から祝福されたものだ。

エミは小さい頃からピアノを習っていただけあって耳がいい。初めて聴いた曲を即弾くことができる。ショートヘアで小柄で可愛い顔をして、辛辣な言葉を吐くこともある。ソウマが苦労して生み出した曲に対しても「面白くないね。サビもどっかで聴いたことあって新味がないし」などとひと言で切って捨てるようなこともする。実際エミの書く詞はバンドに採用されることはないが、皮肉をユーモアで包んだユニークなものだ。ソウマはそんな彼女をかっこいいと思う。ソウマにとって、エミは曲作りにおける有能なアドバイザーであると同時にちょっと怖い存在でもあるのだ。トシとヒデもエミには一目置いている。

ソウマはタイの乾いた太陽の下でくつろぎながら、保育園で子どもたちに囲まれたエミの姿を想像すると、頬が緩んだ。

「何、笑ってるのよ」

「エミが保母さんしてるなんて、信じがたいよ」

「そう？小さい子って面倒くさいけど、ホント正直だからね。ちょっとしたことで泣き喚いたかと思ったら、ニコニコしてたり、感じたまま表情もコロコロ変わって、面白いよ」

「ふうん」

「それにしても、西洋人のおじいさん、おばあさん多いね」

「そうだね。有名なリゾートだからね」

「なんだかタイじゃないみたい」

二人はウトウトと、タイの光の中に漂っていた。

次の朝、二人は小さな船でピーピー島に渡った。ウミツバメが生息し、中華料理で高級食材として知られるツバメの巣が取れるところだ。ツバメたちは崖の上の方に巣を作るので、現地の男たちは危険を冒して、その巣を取りに行く。崖の奥はコウモリたちのねぐらになっているため、その下の土壌はコウモリの糞で黒くなっていた。鼻をつく異臭に、エミはその場を離れようと、向きを変えた拍子に、足を滑らせて手をついてしまった。ベッタリとくっついたコウモリの糞の臭いは、いつまでもエミの鼻に残った。急に咳が立て続

けに出て、涙さえ滲ませたエミをソウマは抱えるようにして、船に戻った。
「大丈夫か？ひどい臭いだったね」
「うん、動物の棲むところって臭いものだけど、島全体がコウモリの巣みたいなもんだから、臭いも半端じゃないよね」
二人はプーケット島でもう一泊したあと、バンコクを経由して、無事日本に帰ってきた。

エミの夏休み最終日である日曜日、心斎橋の「チャンダラ」というライヴハウスでソウマたちのバンド「クレバー・セル」は他のバンドと合同でライヴをした。ソウマをはじめ、バンドのメンバーは、聴きに来てくれた後輩やファンと、音楽にどっぷり漬かる濃密な時間を分け合った。ライヴが終わった後、出演バンドのメンバー皆で飲みに行って、互いに批評し合ったり、情報を交換したりして盛り上がった。お開きになってエミはいつものようにソウマの部屋に泊まりに来た。ソウマは少し酒が入ってトロンとしたエミが大好きだ。二人でシャワーを浴びて、歯を磨き、ソウマがエミの後ろから抱きつくような形で眠った。
朝、エミは咳が出て鼻がムズムズするからと、風邪薬を飲んで、仕事に行った。夜の十一時過ぎに、ソウマがバイトから帰ると、エミは服を着たまま、ベッドで苦しそうに寝返りを打っていた。額に手を当てると、かなり熱い。薬を飲ませようと、水を汲みに台所に立ち、何気なくエミのほうに目をやると、台所のオレンジ色の明かりが暗い部屋のエミの顔を照らしていた。そのエミの鼻からホコリのようなものが光に反射してキラキラしながら、流れ出ている。
「えっ？」と駆け寄って、じっと見てみたが、もう何も見えなかった。
エミが目を開けた。
「さあ、薬、飲んで。何か食べる？」
「のど、渇いたわ。何かある？」
「ビールしかないや。コンビニで買ってくる」
ソウマは暗い通りに出た。夜道を歩いていると、さっき目にした光景が一瞬頭をよぎったが、コンビニに入って、エミの好きなジュースを探しているうちに、妙なホコリの存在は頭から飛んでいってしまった。
次の日、エミは仕事を休んだ。体はずいぶん楽になったが、まだ熱もあるし、子どもたちに移してはいけないと思ったのだ。夕方には熱も下がり、元気が戻ってきた。タイで買ったカレーペーストでグリーンカレーを作り、ソウマの帰りを待った。
「いい匂いだな」
十時ごろ、ソウマが鼻をクンクンさせながら、玄関に立っていた。
「でしょう？早く食べよ」
「食欲、戻ったんだね」
「熱が下がったら、うそみたいに元気よ」

「そうか、よかった。うまそう！」
一口食べて、ソウマが言った。
「グリーンカレーって、ナンプラーの匂いがするよな。タイ楽しかったね」
「うん。今度は有名な観光地じゃなくて、田舎に行ってみたいな。一ヶ月ほどそこで暮らせたらいいのにな」
「また行こう！」
ソウマとエミはデジカメで撮ったタイの写真をスライドショウで見ながら、お互いに突っ込みを入れあって、二人の初旅行を振り返った。その夜、ソウマは華奢なエミの体を優しく抱いた。

週末「クレバー・セル」は中津の「テンプテイション」でライヴをした。今回は単独ライヴなので、大学の先輩や後輩、軽音のＯＢもたくさん来てくれて、にぎやかなライヴになった。二回生のサユミは、軽音サークルに入っている友達に誘われて、初めて「クレバー・セル」のライヴに来た。サユミはまだ高校生と言っても通るほどの幼い顔立ちなので、タバコの煙がモウモウと立ち込めるライヴハウスには場違いな感じで、居心地悪そうにしていたが、次第に音とエネルギーに引き込まれ、いつのまにかリズムに合わせ、体を動かしていた。そして、額に汗を滲ませて、ギターをかき鳴らし、シャウトするソウマから目が離せなくなった。ソウマはハンサムではないが、がっちりした体つきで、手足が長いので、ステージで演奏していると、大きくて魅力的だ。サユミはライヴの間中ずっと背伸びをして、ソウマの一挙一動を見逃すまいと必死だった。
ライヴの後、メンバーは聴きに来てくれた皆と打ち上げに繰り出した。エミは体調がすぐれないので、一人早めに帰ったが、他の三人は羽目を外して酔いつぶれた。サユミも飲み慣れないカクテルを何杯も飲んだせいで、足元がおぼつかなくなり、ソウマが送っていくことになった。サユミは吐き気がひどく、乗り物に乗れる状態じゃなかったので、ソウマは仕方なく中津の自分のアパートに連れて帰った。二人ともベロンベロンに酔っていたので、そのままベッドに倒れこんで、眠ってしまった。
朝方、目を覚ましたサユミは隣で眠っているソウマを見た。一瞬息を呑んだが、次の瞬間には笑みが広がった。そして、ゆっくりと服を脱ぎ、ソウマに覆いかぶさった。
「えっ？どうした？」
わけが分からないソウマは裸で微笑んでいるサユミを間近に見て驚いた。前髪を切りそろえた子どものような顔からは想像もつかない肉感的な体に圧倒された。ソウマの脳の中で何かが弾けた。今まで感じたこともないような強い衝動に逆らえず、逆にサユミをベッドに押し倒し、夢中で腰を振っていた。
サユミはベッドの中で目を開けて、しばらく甘い余韻に浸っていた。ソウマはまた静かな寝息を立て始めている。まだ眠りの中にいるソウマを起こさないように、そっとベッド

を抜け出して、洗面所に立ったサユミの目は青い歯ブラシと並ぶ赤い歯ブラシをとらえた。顔を洗う気も失せて、すぐ部屋に戻り、そんなに広くもない空間を注意深く見回した。すると、ベッド脇のカラーボックスに女物のラベンダー色のパジャマが畳んで入れられているのが見えた。サユミは部屋中に見知らぬ女の匂いを感じ、唇を噛んだ。

月曜の朝、ソウマはサユミと連れ立って大学にやってきた。たまたま正門付近でヒデに会った。

「あれっ？ソウマ、サユミちゃんと一緒だったのか？　エミ、知ってるの？」

「いや」

「ふうん」

ヒデは二人を見比べるような視線を残し、スタスタとA棟に向かった。

サユミは答えを求めるように、ソウマの目を見た。ソウマは深く息を吸ってから、サユミをまっすぐ見て、答えた。

「エミはバンドのベースを弾いてる子だ。オレはエミと音楽を通じて強い絆で結ばれている。彼女はオレにとって大切な人生のパートナーなんだ。サユミちゃんはとても魅力的な女の子だけど」

サユミはしばらくソウマを見つめていたが、目を伏せると、いきなりソウマの首に手を回し、熱いキスをして走り去った。

そのキスが引き金になったのか、サユミの姿が視界から消えると、ソウマは前を歩いている軽音部の後輩のタエにギラギラとした目を向けた。足早に追いつき、軽く肩に手を回してささやいた。

「タエ、オレと付き合えよ」

「ヤダあ、先輩。学校へ来たばっかりなのに何言ってるんですか」

タエは媚を含んだ目でソウマの真意を探るように見た。ソウマはにやりとして、タエの肩を抱きながら、Uターンし、キャンパスを出て行った。

土曜日、バンドの練習があった。ソウマが新曲を持ってきて、メンバーに聴かせた。官能的なバラード調のラヴソングだ。シンプルな言葉だが、うねるようなギターの音に乗せられると、力強く心に迫り、魂が揺さぶられるような曲になっていた。憑かれたように聴いていたメンバーは熱くなって、どんなアレンジがいいか、さっそくアイデアを出し始めた。試し弾きをして、互いの音を合わせたりしていると、突然エミが言った。

「耳が変。何かトンネルの中に入ったときみたい。ぼんやりしてて、はっきりとした音が入ってこない」

トシが心配して尋ねる。

「風邪はちゃんと治った？風邪のウィルスが耳に飛ぶこともあるみたいだよ」

「風邪は二日ほど熱が出ただけで、すぐ治ったんだけど」
「長引くようなら、病院で診てもらったほうがいいよ。難聴になることもあるし」
「そうするわ」
いつもなら一番先にアレンジのアイデアを出すエミが音をつかみかねて、苦しんでいる。早めに練習を切り上げて、エミはソウマに寄り添うように歩き、彼のアパートに向かった。部屋に着くと、ドアの前にサユミが立って、睨むように二人の様子を見つめていた。
「エミさんですね。わたし、ソウマさんのこと、好きになってしまいました。この前のワンマンライヴの夜、ソウマさんのとこに泊まって…。エミさんのこと、ソウマさんから聞いて、あきらめようと思ったけど、やっぱり無理です。ソウマさんをわたしにください」
泣きながら、すがりつくようにエミを見るサユミに、エミは静かに言った。
「あなたの気持ちは分かったわ。人を好きになる気持ちをやめさせることはだれにもできない。でも、ソウマをあげるなんて、わたしには言えない。ソウマの心は誰のものでもない、ソウマのものなのよ。二人で話し合ってみるから、きょうは帰ってくれる？」
サユミはソウマとエミを交互に見つめてから、帰っていった。
部屋に入った二人は向き合っていた。
「ソウマはどうしたいの？」
「言い訳になるけど、ライヴの後のことは弾みなんだ。あの時自分の行動をコントロールできなかったんだ。自分でも情けないと思うよ。サユミはとてもかわいいけど、それだけだよ。エミはオレにとって唯一無二の大切な人なんだ」
「わたしはソウマの言葉を信じていいのね」
「うん」
「分かった。ウソはつかないでね。わたしにも自分自身にも」
ソウマはエミといると、昔からの自分でいられる。理性的にふるまうこともできるのだが、最近エミのそばを離れると、動物的な本能が膨らんでくる。それを抑えるのが日に日にむずかしくなってきたようで、不安さえ感じる。彼は四回生なので、毎日キャンパスに行くわけではないが、大学にいるときは、サユミやタエ、その他にもサークルの後輩やゼミの友達など、常に毎回違う女の子を連れていた。

サユミはソウマのそばにいたいからか、軽音のサークルに入り、初めてギターを手にして悪戦苦闘している。その一生懸命な姿を見ると、男子部員は思わず指導を買って出てしまう。トシもその一人だ。
「わたし、手が小さくて指が細いから、弦がうまく押さえられなくて」
「慣れてくるよ。指も太くなって、力がついてくれば、いい音が出るようになるさ。Eフラットは、こう押さえたほうが楽だよ」
「あっ、そうか。こっちのほうが押さえやすいですね」

「でも、サユミちゃんはギターよりキーボードのほうが向いてるかもね」
「わたし、やっぱりトシさんみたいにカッコよくギター、弾きたいです」
サユミに上目遣いにそんなふうに言われると、トシもついにやけてしまう。
「先輩、駅前に古着屋できたんですよ。見に行きませんか。ライヴで着る服とかおもしろいのがあるかもしれませんよ」
「行こうか」
サユミはペロッと舌を出して、この前ソウマと言った古着屋にトシを連れて行った。あれこれ迷ったあげく、トシは古いジーンズを買った。
「これ、トシさんにぴったり。かっこいい！」
サユミのひと言で、少々値の張るジーンズを衝動買いしてしまい、なんだかへこんでいるトシにサユミは甘い声でささやいた。
「トシさん、わたしのアパートに寄りませんか。実家からおいしい明太子、送ってきたんです」
「えっ、いいの？」
笑顔の戻ったトシの腕をとって、獲物を引いていくように、サユミは自分のアパートに急いだ。

週末久し振りにエミがソウマのアパートにやってきた。玄関には派手なブーツが置かれ、ハンガーには花柄のシャツがつるされていた。そのピンクのシャツを手に取りながら、エミは言った。
「何か、テイスト、変わったね」
「そうか？新しいものにチャレンジしないとな。駅の向かいに新しく出来た古着屋で買ったんだ」
「ふうん。トシもそんなこと言ってたな。まっ、いいか。これ、デパ地下でかってきたシューマイとサラダ。食べよ」
「おお、サンキュ」
ビールで乾杯し、シューマイをほおばった。
「卒論、進んでる？もう九月半ばだよ」
「うん、データ、集めて、まとめてみたんだけど、見てくれる？」
ビールを片手に、パソコンの画面を見ていたエミは厳しいアドバイスをした。
「データの羅列になってるよ。仮説を立てて、データを取って考察してから、結論導かないと。仮説と違う結論になってもいいんだよ。」
「データの羅列か。そう言われれば・・・」
二人はデータ解析について、意見を出し合い、方向性が見えてきたので、一息ついていたとき、エミが口を押さえて、トイレに駆け込んだ。次から次へと吐き気が押しよせ、胃

の中のものをすべて戻してしまった。その吐瀉物がムラサキ色を呈しているのを見て、エミは不思議に思った。何かムラサキ色のものを食べたかなと記憶をたどっていると、ソウマが様子を見に来たので、エミは急いで水を流した。
「大丈夫？何か変なもの、食った？」
「ううん、昼もおにぎりと卵焼きしか食べてないよ」
「食い合わせとかじゃないよな」
「ない、ない。風邪、まだ残ってるのかな？耳はもうなんともないけど」
考え込んでいたエミがさっと顔を上げて言った。
「まさか、妊娠？」
「えっ、ピル飲んでるって言ってたじゃないか」
「飲んでるよ」
「じゃ、あり得ないだろ？」
「ピルで百パーセント避妊できるとは限らないんじゃない？」
「まじぃ？冗談じゃないよ」
「ちょっと待って。まだ妊娠って決まったわけじゃないし、明日にでも妊娠検査薬、買って来るわ」
「まだドラッグストア、やってるだろ？」
「もう！せっかちね」
仕方なく薬局に走り、薬を買って来て、試したら、マイナスだった。
「よかった！」
そのときのソウマの心底安堵した顔を見て、エミはなぜか涙がこぼれた。ソウマに気付かれないように、そっと拭い、すっかり気を取り直してビールを飲んでいるソウマの横顔をじっと見つめた。わたしはこの人の音楽の才能を愛していただけなのかもしれないと思ったエミは、その夜気分が悪いからと自分のアパートに帰った。

水曜日、いつものように大学のホールでサユミと昼食を食べていたソウマは激しく咳き込み、テーブルに突っ伏した。サユミが驚いて、ソウマの顔を覗き込んだ。
「ソウマ、どうしたの？」
サユミはソウマの頬に触れて、高い熱があるのに気付いた。すぐにソウマは顔を上げ、大丈夫だというふうにサユミを見たが、立ち上がろうとすると、フラフラとイスに崩れ落ちた。サユミはソウマを支えながら、自分のアパートに連れて帰り、ベッドに寝かせ、しばらく様子を見守っていた。
夜になって、ソウマが落ち着いているのを確認してから、サユミは言った。
「汗、かいたでしょ？下着とか着替え、取って来るわ。部屋の鍵、貸して」
朦朧としているソウマからアパートの鍵を預かり、彼の部屋に急いだ。

鍵を開けて入ったところ、大きな紙袋を持って、玄関に立っているエミと鉢合わせをした。サユミはエミの手に握られた妊娠検査薬の箱を食い入るように見つめた。それに気付いたエミは慌てて打ち消した。

「違うのよ。これは・・・」

エミの言葉をさえぎるように

「ソウマはわたしのものなんだから。絶対渡さない！」

サユミはそう言うと、すっかり人が変わったような鬼の形相でエミに詰め寄った。サユミの勢いに、エミは後ろに飛ばされ、思わず尻をつくかっこうになった。サユミは流し台のカゴの中にあったナイフを目にし、それを乱暴につかむと、倒れたエミの腹を深く突き刺した。血のついたナイフを手に、後ずさりするサユミを見上げ、エミは悲しそうに言った。

「バカね」

サユミは動かなくなったエミを満足気に見下ろしていたが、すぐに我に帰って、ガタガタと震えだした。

「わたし、何してるんだろ。エミさん！」

声をかけながら、エミを揺すったが、何の反応も帰ってこなかった。自分に血がついているのに驚いたサユミは、汚れた手を荒い、服を脱いで、ハンガーにかけてあったソウマのシャツを着た。引き出しやクローゼットから着替えを出し、バッグに詰めると、振り返りもせず、鍵を閉めて、その場から立ち去った。

アパートに帰ると、ソウマは死んだように眠っていた。サユミはソウマに軽くキスをして、持ち帰った血のついたナイフと服を黒っぽい袋に入れて、明日生ゴミといっしょに出そうと思った。

「クレバー・セル」のライヴが日曜日にあるので、前日の土曜日、メンバーは集まって練習することになっていた。朝の十時過ぎには中津の貸しスタジオにソウマとヒデとトシがいた。いつもなら一番先に来て、部屋のエアコンをつけ、ベースのチューニングをしているエミが三十分過ぎても、姿を現さなかった。トシがソウマに尋ねた。

「きのうエミに聞きたいことあったから、電話したけど出なかった。で、メイルしたんだけど、返信まだなんだ。エミ、どこにいるの？」

「オレ知らないよ。風邪で熱が出て寝込んでたし」

ヒデも心配する。

「エミが連絡もしないで遅れるなんて、変だよ。何かあったんじゃないか？ソウマ、もう一度連絡とってみてよ」

「分かった」

サユミの部屋にずっといた後ろめたさから、エミとは連絡を取っていなかったソウマも

心配になって、電話してみたが、呼び出し音がなるばかりだった。エミが体調を崩していたのを思い出し、ソウマは皆に言った。
「オレ、エミのアパート、行ってみるよ」
「オレらも行くよ」
三人は各々のバイクでエミのアパートに急いだ。ブザーを押しても、ノックをしても、返事がないので、ソウマの持っている合鍵で中に入った。きちんと片付けられた部屋には誰もいない。カーテンも閉まったままで、なんだかしばらく人がいなかったような空気だ。ソウマは胸騒ぎがした。
「じゃ、オレのアパート、行ってみるか？オレ、三日帰ってないんだけど」
「どういうこと？サユミちゃんとこにいたのか？」
「まあ、そういうこと」
ヒデが言いにくそうに話し始めた。
「ソウマ、おまえ最近おかしくないか？サークルの後輩の女の子、何人とも付き合ってるってか、寝てるみたいだし。エミとどうなってるの？」
「エミとはうまくいってると思うけど、自分でも自分の行動が理解できないことがあるんだ。時々自分をコントロールできなくなっちゃうんだよ。スイッチ入ると、突き動かされるように体が欲するまま動くっていうか」
トシも告白する。
「オレもちょっと可愛い子、見かけると、つい声をかけてしまうし、なんか本能を抑えるのが難しいんだ。どうしちゃったんだろう？」
ヒデはソウマとトシ、二人の顔を見て、言った。
「おまえら二人ともサユミと寝てるんだろ？サユミもおかしいよ。キャンパスで毎回違う男と腕からませて歩いてるよ。何かさあ、サークル全体も妙な感じだよ。不健康な男と女の匂い、ムンムンしててさ、目に見えない何かに侵されつつあるような気がしないか？」
三人はサークルの雰囲気が生臭くなっていることを認め合ったが、その原因については誰も答えを出せなかった。思い焦燥感を共有しながら、三人はソウマのアパートに向かった。ドアを開けた瞬間、ひどいにおいに襲われた。
「うっ！　なんだ、この臭いは？ソウマ、おまえ、生ゴミ、ちゃんと捨ててるのか？」
などと軽口を叩いていたが、台所に入って、血溜まりの中で仰向けに倒れているエミを見て、絶句した。
「エミ！」
思わず駆け寄ったソウマだが、あまりの死臭に吐き気を覚えた。他の二人も鼻と口を押さえている。どうしていいのか分からず、三人は死んだエミをじっと見ていた。ヒデが口を開く。
「おい！警察呼ばないと！」

ヒデとトシは部屋の外に出て、警察に連絡した。一人になったソウマは台所を見渡した。エミの傍らには紙袋が転がっていて、そこから赤い歯ブラシが飛び出している。よく見ると、エミのパジャマが入っていた。手には妊娠検査薬の箱を握り締めている。エミは自分のものを取りに来たのかと思いながら、部屋に目を移すと、下着を入れてある引き出しが少し開いていて、クローゼットかシャツがはみ出していた。サユミが着替えを取りに来たんだった。彼女はいつ来たんだ？ソウマは混乱していた。打ち消したい恐ろしい想像が頭から離れない。ふとテーブルの上を見ると、便箋が一枚置かれていた。

「ソウマ、あなたにとってわたしは必要な存在かもしれないけど、あなたのそばで微笑んでる人生のパートナーではなかったようです。恋人であることは終わりにしましょう。バンド仲間として『クレバー・セル』の活動は続けたいと思います。ソウマとあなたのかわいい人がこだわらなければの話ですが。今までどうもありがとう。タイ旅行、楽しかったよ。じゃ、また」

ソウマは手紙を手にしたまま、動けずにいた。己の身勝手さ、エミの強さ、本当に大切なものを失ってしまった喪失感に涙が溢れた。

バタバタとした足音で、ソウマは現実に引き戻された。玄関を振り返ると、刑事と思われる男が二人立っていた。若い方の刑事が警察手帳を見せながら、ソウマの手から、すっと手紙を取り上げ、目を通し、死んでいるエミを一瞥して尋ねた。

「あなたは？」

「山内ソウマです。この部屋に住んでます」

「この女の人は？」

「佐津川エミです。ボクの恋人です」

「今から検死を行いますので、外で待っていてください」

「はい」

「鑑識さん、入ってください。よろしくお願いします」

その一声で三人の鑑識が部屋に入ってきて調べ始めた。エミの体を調べていた鑑識が叫んだ。

「何だ、これ？」

他の鑑識も集まってきて、エミの体を覗き込んでみている。

「傷口を中心にカビのようなものができてる」

「胞子もつけているようだ。こんなの見たことがない」

二人の刑事も気味悪そうに眺めている。

「死因は？」

「ナイフ状のものによって刺されたことによる失血死と思われます」

「死亡推定時刻は分かりますか」

「今年の九月は異常に気温が高かったから、腐敗がかなり進んでいます。死後三日という

ところでしょうか。この妙なカビ状のもののこともあるし、解剖してもらわないと、はっきりしたことは分かりませんね」
「そうですか」
年配の刑事がソウマに向かって言った。
「それじゃ、そこのお友達二人とあなたにも署に来てもらいましょうか」
ソウマは視線をエミに向けたまま、無視したように動かなかった。
「おいっ！聞いてるのか？」
肩をつかまれて、やっと声をかけられたことに気がついた。
「すみません。聴こえなかったもので。どうして耳が聴こえにくくなったのかな？」
「ショックだったんじゃないか？一過性の難聴ってよく起きるみたいだよ」
三人は刑事に促されるまま、パトカーで警察に連れて行かれた。

エミの解剖を任された医師は奇妙な遺体に戸惑っていた。ナイフの刺し口を覆うようにムラサキのカビ状のものが発生し、そこから毛髪のような細い繊維が何本も生えて、先に小さな袋をつけている。少しメスを入れると、傷口に向かって、カビの菌糸のようなものが集まって来ているのが見えた。まるで傷口を塞ごうとしているようだった。さらにからだを開いていって、内臓が現われると、信じられない光景を目にした医師は思わず大声を上げた。
「な、なんだ、これは？」
肺をはじめ、気管から鼻や耳に繋がる管すべてにムラサキ色の血管のようなものが這うように伸びていた。それは呼吸器に留まらず、消化器である胃や十二指腸、小腸に至るまで体中に広がっていた。
特に生殖器への浸潤が顕著に見られた。ムラサキ色の網の固まりと化していることから、早い時期に侵されたことは明らかだ。幸い、脳はまだ健康を保っているようだが、よく見ると、目や耳や気管からムラサキ色の菌糸状のものが脳を目指して、競うように伸びてきているのが見て取れた。脳が支配されるのも時間の問題だったのかもしれない。
また、普通カビ類は好条件下にあれば、菌糸を伸ばせるだけ伸ばすものだから、もしこの異様なものがカビなら肺全体を覆いつくしてもおかしくないのだが、この遺体の臓器に広がる菌糸状のものは一つの臓器全体を支配するには至っていない。つまり、各々の臓器がその機能を果たすのに支障をきたすであろうギリギリのところで、増殖は見事に止まっているのだ。異物が体内に入った場合、免疫システムが働くため、発熱などの症状は当然生じたはずだが、深刻な状況になる前に、別の臓器に移っているように感じられた。解剖医が頭を抱えていると、鑑識が興奮しながらやってきた。
「先生、このムラサキ色の物体の正体が分かりましたよ」
「これは一体何なんだね？」

「カビの一種です。学名がヒストプラズマ・カプスラートゥムというようです。それが、日本にあるはずのない種類なんです。主にある種のコウモリの糞を栄養として菌糸を伸ばし、条件が悪くなると、菌糸を伸ばすのをやめて、胞子を作り、空中に飛ばして増えるようです」
「その胞子を吸い込むと、人体にどんな影響が出るんだい？」
「人体との関連については何の記述もありません。人体に影響がないと思われているのか、まだ知られていない領域かもしれません」
「なるほど。ちょっと、これ、見てくれ」
「何なんですか。このムラサキ色の血管のようなものは？」
「たぶんこのカビの菌糸だよ。この部分を見てくれ」
「穴ですか？被害者は肺に穴ができていたんですね。穴を中心に菌糸が四方八方に伸びているように見えます」
「そうだな。運悪くこの穴にカビの胞子が入ってくっついたんだろう」
「何か肺の病気をしたことがあるのかもしれませんね」
「それで、このカビはどこから来たのか分かったのか？」
「アジアではインドネシアのボルネオ島とタイのプーケット島でしか見つかっていないようです」
「ふうん、おいっ！ちょっと見てみろ！遺体の口と鼻から何か出てるぞ！」
「ほ、胞子ですか？」
「傷口から生えてる胞子嚢からも飛んでる」
「ライトで反射して、キラキラ光ってきれいですね。次から次に流れ出てくる」
「宿主が死んでしまって、菌糸を伸ばせないから、胞子を作ったのか？」

解剖室で二人が今まで見たこともない光景に愕然としている頃、取調室ではソウマが事情聴取を受けていた。ショックと恐怖でソウマはかなり参っていた。
「水曜日はどこで何をしていたんだ？」
「水曜日は大学に行って、友達とごはんを食べてたら、急に気分が悪くなって。その友達のところで休ませてもらいました」
「その友達の名前と住所、電話番号を教えてくれますか」
「ええ、足立サユミ。住所は知らないけど、阪急の千里中央の駅の近くに住んでます。携帯の電話番号なら分かりますけど」
刑事はもう一人の刑事に目配せをして、サユミの電話番号を写させた。
「女の子か。死んだ子は君の恋人じゃなかったのか？」
「そうなんですけど」
「まあ、いい。で、木曜日と金曜日はどうしてた？」

「水曜日の夜から金曜日まで、自分の部屋に帰らないで、ずっとサユミのとこにいました」
「じゃ、君が新しい恋人のところにいる間に被害者が来て、テーブルに別れの手紙を置いて、自分の歯ブラシとパジャマを紙袋に入れ、部屋を出ようとしていたとき、偶然入ってきた何者かに刺されたってことかな？」
「そういうことになりますね」
「まあ、そのサユミって子にも来てもらって話を聴くことにする。君はきょうはもう帰っていいよ。でも、また来てもらうことになると思うけどね」
「はい、分かりました」
ソウマはイスから立ち上がろうとしたとき、激しい吐き気に襲われ、取調室の床に戻してしまった。
「うっ、すみません」
「おいおい、大丈夫か？」
迷惑そうに相馬の吐瀉物を見た刑事はギョッとした。ムラサキ色の液体が飛び散っていたのだ。

サユミの部屋の前に二人の刑事が立っていた。チャイムを鳴らすと、長い髪の童顔の女の子がドアの隙間から顔を出した。刑事が警察手帳を示しながら言った。
「足立サユミさんですね。佐津川エミさん、ご存知ですね」
「はい」
「お聴きしたいことがありますので、署まで同行していただけませんか」
「分かりました」
チェーンを外したサユミは咳き込みながら、玄関にうずくまった。

警察署内は騒然とした空気に包まれていた。佐津川エミという被害者を解剖した医師が彼女の解剖結果について皆で情報を共有しておきたいからと、急遽手の開いている署内の刑事を集めたのだ。刑事たちは医師の話を待った。
「被害者はナイフに刺され放置され、大量に血液を失い、死に至ったものと思われます。それと、これは直接の死因ではないと思いますが、彼女の内臓からムラサキ色のカビの菌糸が大量に見つかりました」
刑事たちは口々に質問する。
「人の体に菌糸を伸ばすカビって何ですか」
「そのカビか体内に入ると、どんな症状が出るんですか」
「それは人から人に感染するんですか」
医師は考えながら答えた。
「そのカビは東南アジアの一部に生息するもので、通常コウモリの糞の中に住んでいるこ

とは分かっていますが、人との関わりについての報告はありません。しかし、わたしはこの目でそのカビに侵された体を見てしまいました。そこで、鑑識とも話し合い、早急にに手を打たないと大変な事態になりかねないと判断し、わたしの見解を述べさせていただきます。何のデータもない上に、サンプルが一例だけなので、多くは想像の域を出ませんが。そのカビ、ヒストプラズマ・カプスラートゥムは人体への害などの記述がないことから、健康な人がそのカビを吸い込んでも、免疫システムがカビの増殖を阻み、特に重篤な症状は現われないものと思われます。ただ、肺に何らかのトラブルを抱えている場合、被害者の場合は肺に空洞がありましたが、また、免疫力が落ちている場合、このカビの胞子を吸い込むと、菌を殺せず、肺に留まってしまうのではないでしょうか。そして、肺を中心にして、四方に菌糸を伸ばし、近接する臓器に広がっていくようです。早い時点で生殖器が侵されているのはカビが増殖の可能性を広げようとしている、つまり、性交渉を通じて増殖しようとしていると思われますので、人から人に感染するおそれを考慮に入れるべきだと思います。さらに恐ろしいのは、どうやら脳にも触手を伸ばすようなのです。そうなれば、元々の宿主の持つ性格やポリシーにも因るでしょうが、思考や行動に重大な影響が出てくるのではないかと思われます。今のところどのような症状が出てくるのか見当もつきません。

死体の傷口からの出血部分に胞子が認められたことと、死後口や鼻から胞子が飛ぶのが見られたことを考え合わせると、保菌者が死んだら、カビは菌糸を伸ばすのをやめて、胞氏を作り、空中に飛ばすことによって、次の宿主を探すのではないかと考えます」

年配の刑事が尋ねる。

「そのカビは人を死に至らしめることはないのでしょうか？」

「分かりません。このカビは一つの臓器の機能を停止させるほどは広がらず、別の臓器に移っているような気がします。まるで、意志を持って、自己をコントロールしつつ、計画的に増殖を進めているように見えるのです。

生殖器から感染した場合どうなるのか、サンプルがないのでなんとも言えませんし、先ほども言いましたが、脳に達するようなことがあれば、宿主の人格を支配しかねないのではとないかと・・・」

取調べを終えたソウマが廊下を歩いていると、会議室のドア越しに大勢集まっている様子が覗えた。しばらくすると、静かになって、誰かが喋りだした。よく通る声でソウマにも大体の内容は聞き取れた。医師らしい男の話を頭の中で反芻し、ソウマはこれまでのエミの体調や自分自身の風邪のような症状や心の変化が、カビの増殖と結びついているのではないかと不安でたまらなくなった。ソウマは崩れゆく頭で自問し続けた。

「オレはコウモリのカビ菌に侵されたエミから感染したのか？エミやオレの風邪みたいな症状は内臓にカビが入り込んできたせいなのか？オレが自分の行動を制御できないのは脳

がカビにやられたからなのか？　オレは、オレはサユミやタエやサークルの女の子たちに菌をばら撒いてしまったのか？ナントカしないと・・・。カビがみんなの体の中で、菌糸を伸ばし、理性を奪い人の行動を操り、どんどん宿主を増やし、増殖していく。みんなにこの重大な情報を一刻も早く伝えなければ」

パニックにあって、ソウマは残された理性を働かせ、自分のとるべき行動を見つけた。そのときだ。何かがソウマを走らせた。ソウマはわけが分からないまま走り続け、歩道橋のところまで来た。それを一気に駆け上がり、顔をゆがめながら、バンザイをしたかっこうで道路に飛び降りた。ソウマは道路に叩きつけられ、走っててきたトラックに轢かれ、そこかしこに血が飛び散った。

外の騒ぎを聞きつけて、警察署から刑事たちが飛び出してきた。道路に横たわっているのが、さっきまで取調室にいた山内ソウマだと知って、刑事たちは呆然とするばかりだった。ソウマの体は救急車に乗せられ、病院に搬送されたが、もう既に息はなかった。後には夥しい血が残されていた。

何日か後に道路の隅の血痕からムラサキ色の胞子がひっそりと流れ出していた。

（了）

（参考）

浜田信夫『人類とカビの歴史、闘いと共生と』朝日新聞出版、２０１３
トニー・ハート著、中込治訳『恐怖の病原体図鑑』西村書店、２００６